



— 植木屋さんのおすすめ植物（その6） —

## ヒトツバタゴ

モクセイ科の落葉広葉樹で、5月ごろ、ひらひらとした純白の花を付け、樹冠に雪が積もったような魅力的な姿を見せてくれる。地植えでは10m以上になる高木だが、剪定で高さを抑えることができ、家庭でも育てられる。また、放任しても樹形が自然に整い、暑さや病害虫に強いことから手もかからない。ちなみに、栽培されたヒトツバタゴの木は市場に広く出回っているが、国内の自生地は少なく、天然記念物に指定されている場所もある。  
※別名「ナンジャモンジャの木」だが、他の木を指すこともあるので注意





## 川口市公園紹介記 (その6)

# 市 花と彫刻の文化の香り漂う のシンボリック存在の川口西公園

川口市自慢の公園である。名称は「川口西公園」だが、同市の中心地ともいえるJR川口駅に隣接し、駅前広場を隔てて川口総合文化センター・リリア、また周辺には高層の商業施設や住宅が立ち並ぶ一等地。市民の憩いの場とともに災害避難広場となる機能を備えているうえ、地場産業の緑と鋳物を活用した駅前公園で、同市のシンボリック存在ともいえよう。

公園は、総面積31,039㎡で、昭和62年に建設工事に着手、平成3年3月に完成し開園した。鉄道線路に沿って長さ約300mの長い楕円形で、花と彫刻・コミュニティ・イベント・多目的など6つの広場に区分されているのが特徴。

川口駅東西口の連絡路に直結しているのがコミュニティ広場。面積7,067㎡で、緑の木立の中にベンチなどが備えられ、ゆっくり憩うことができる。北隣には、広さ4,535㎡のイベント広場がある。収容人数100人ほどの階段式客席もあり、階下にはきれいに整備された芝生が円形に広がる。令和2年はコロナ禍で中止となったが、毎年、奉仕団体が集まってボランティア見本市が開催されているほか、民間のグループの音楽や踊り、バザールなどの催しにも利用されている。

この奥に広さ12,840㎡の多目的ゾーンが広がる。メインとなる中心部は「桜の園」と名付けられ「滝」が設けられている。滝からは長さ200m、幅1mほどの蛇行する流れが公園北端まで続く。兩岸には岩石が埋め込まれ、あたかも溪流を模した造りだ。

この流れに沿って二つの広場がある。一つは遊びの広場。雲梯、トンネルスライダー、複合遊具などがふんだんに備えられ子供たちを喜ばせる。もう一つは多目的に使われる土の広場だ。

花と彫刻の広場は公園の南側にある。広さ6,597㎡に花壇が広がり、それを取り囲むように鋳物製を主とした彫刻やモニュメントが数多く据え付けられており、文化の香りが漂っている。彫刻やモニュメントはここだけではなく、園内のあちこちに設置され公園の格調を高めている。

公園には樹木も多く植えられ、駅周辺のコンクリートジャングルの中で大きな森を形成している。ケヤキ、クスノキ、シラカシ、ミズナラなどの高木からアセビ、アオキ、ヤツデなどの低木まで1,500本を超える木が緑を生い茂らせている。サクラ、ウメ、ツツジ、サザンカ、ツバキなどの花木も豊富で、四季折々を美しい花で飾る。また、一画には小さな水田が設置され、稲の成長とともに、日本の伝統行事や風物詩などが一年を通して展示されている。

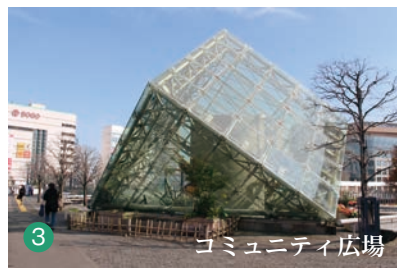
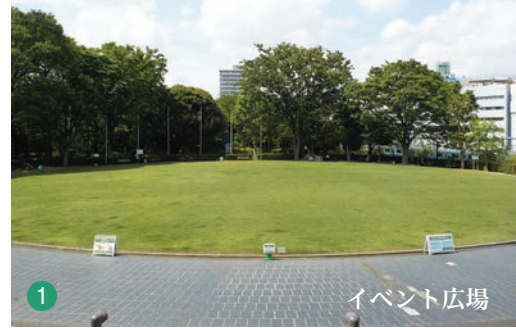
誰しもが行ってみたいくなる公園だ。

## 公園情報

- ① 開園年月日 平成3年3月31日
- ② 所在地 川口市川口3丁目1番
- ③ 面積 31,039㎡
- ④ 植栽数量 高木48種 671本  
中木16種 266本  
低木48種 899本  
※開園当初のデータ
- ⑤ 公園の種別 近隣公園



緑道





## 1 緑を育んだ歴史を次世代へ

波多野 純（日本工業大学名誉教授）

### 住み続ける町に

住みたい町のランキングで、川口はつねに上位にランクされている。その理由を尋ねると、「交通の便がいい割にマンション価格が安い」「便利で生活しやすい」などの意見が多い。確かに都県境を越えると、マンションは若干手に入りやすくなる。でもこの説明には、川口でなければならない特別な理由は、見当たらない。武蔵小杉も同じ理由で、人気が高かった。利便性だけでは、地域に対する愛着は感じられず、「終（つい）の棲家（すみか）」とはならない。町は、何世代も住み続けることによって、歴史を蓄積して落ち着いた町になる。

### ― 鑄物と緑― 身近な川口の歴史 ―

新住民にとっても、住み続ける町になるには、町の歴史を思い起こし愛着の種を見つけるのがいい。川口は、日光御成道の宿場であり、地場産業として鑄物業が栄え、植木や花卉の特産地であった。その歴史は今も受け継がれている。

1000年の歴史があるとされる鑄物業は、江戸時代には鍋釜や梵鐘を作り、近代になると機械部品や建設資材を生産してきた。1958年のアジア競技大会のために作られ、64年の東京オリンピックでも使われた聖火台も、川口の鑄物である。

植木や花卉類は、江戸の周縁部である、巢鴨・駒込・染井・田端などで盛んに生産された。希少品種は、「金生樹（かねのなるき）」と呼ばれるほど珍重され、投機の対象となった。川口の吉田権之丞は江戸の技術を学び、安行植木の祖とされる。明治維新以降も安行の植木業は発展し、国内最大の生産地となった。

川口駅から見渡すと、超高層マンションが林立している。マンションの外観は最新のデザインで統一されているが、町の歴史や地域性を感じさせる要素は少ない。キューポラのある町、庶民が暮らす町のイメージもうすれてしまった。植木の町を感じることができず、川口緑化センター/樹里安や川口市立グリーンセンターなどいくつかの施設に限られる。

### 高層住宅に緑を

鑄物の町川口、植木の町川口。身近に川口の歴史や地域性が感じられる町にならないだろうか。

アビタ67 (Habitat 67) は、1967年のカナダ・モントリオール万国博覧会のテーマ館のひとつとして建設された。設計は、当時まだ20代で、後に世界的な建築家となるモシェ・サフディ。高さは12階もあるが、プレキャストコンクリートによる変化に富んだ積み木のような造形が、威圧感を感じさせない。何しろこの集合住宅、植物が豊富である。どの階の住戸も庭をもち、その緑をまわりの人々と共有している。

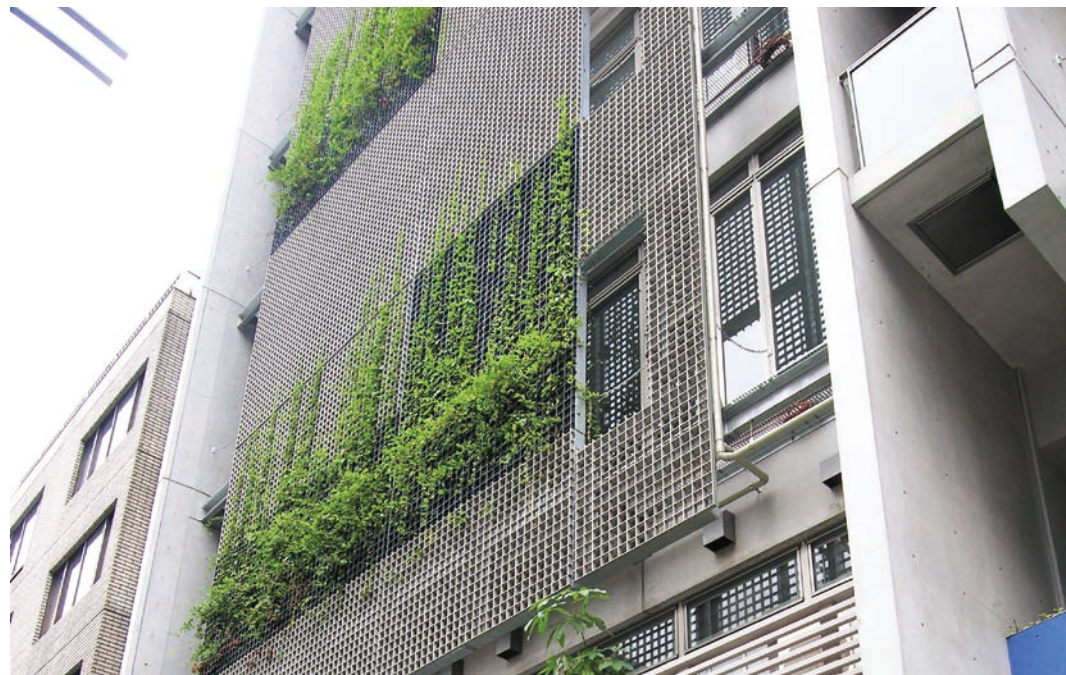
私が設計した、東京神田にある日本工業大学のキャンパスは、アルミ鑄物の格子にプランターが隠してあり、外壁をツタが覆う。散水が歩く人を濡らしては困るので、プランターの土をゆっくりに湿らす装置が仕組んである。壁面の緑は、室内からも楽しめる。

オランダ・ライデンの橋上で土曜日の朝に開催される花市は、屋根のある橋との組み合わせが、町の歴史を感じさせる。

町に歴史や緑は欠かせない。それも身近に感じたい。駅や高層マンションが緑に包まれる、川口独特の記憶に残る風景を作り出したい。



▲アビタ67 カナダ・モントリオール 12階建ての高層住宅だが身近に緑や花が楽しめる



日本工業大学神田キャンパス  
アルミ鋳物の格子と壁面緑化▶



◀オランダ・ライデン  
屋根のある橋と花市



# 記念樹にふさわしい木とそのいわれ

## ウメ



結婚祝い

バラ科 サクラ属 (落葉広葉樹・小高木・陽樹)

写真提供：埼玉県花と緑の振興センター



松竹梅に数えられる、めでたい樹木の代表で、結婚の記念植樹には最適の縁起木。万葉集ではサクラをしのいで多く詠まれている。厳しい冬に耐えて真っ先に咲き始め、しかも誇らぬ花容と香りが、春ごとに人の心をうつ。実を梅干にすれば何年でも腐らぬ持久力を発揮するなど、日本人の心をとらえて離さない。

### 1. 特徴

開花期 2～3月、結実期 6～7月。

### 2. 植えるときの注意

時期 11～12月・2～3月

場所 日当たりが良く、強い風の当たらない場所。水はけのよい土壌を好む。

### 3. 管理のポイント

**肥料** 花後と実の収穫後に化成肥料を、冬季に鶏糞などの有機質肥料を与えること

**剪定** 7月に短い枝のみに花芽が付く、翌年に開花する習性がある。短い枝を増やすためには、12月下旬から1月にかけて花芽がない長く伸びた枝を半分ほどに剪定する。この時に短く切りすぎるとまた長い枝が出てきてしまうので注意すること。



写真：川口緑化センター

参考：日本緑化センター 木を植えよう 記念樹にふさわしい木とそのいわれ



# 川口緑化センターの主なイベント開催結果報告

## 1 第24回朝顔・ほおずき市

令和2年7月4日（土）・5日（日）

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展示レイアウトや導線を工夫し、会場入り口にて体温測定を実施するなどの対策を講じながら開催いたしました。

両日ともに多くの方が来場し、午前中の内に完売となりました。



## 2 第18回緑の学会・ふれあい講演会

令和3年1月23日（土）

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、会場での講演会を取りやめ、オンラインによるライブ配信のみ実施しました。

今回は、園芸研究家でNHK「趣味の園芸」や「あさイチ」などに多数出演されている金子明人氏をお招きして『園芸上達の近道は失敗と枯らすこと』をテーマにご講演いただきました。

講師の経験や豊富な知識を基に、視聴者の方に親しみやすいお話しをしていただき、講演後のウェブアンケートにおいても大変好評でした。





# 日本の伝承行事と植物

日本人は、古来より花や緑の好きな民族といわれてきた。四季折々に、その季節の花鳥風月を愛でるとともに、草木の持つ生命力のたくましさや靈力を信仰とした無病息災や農作物の豊作などを祈願する多くの行事が伝承されてきた。この日本独自の風俗文化を大事に守っていききたいものだ。

## 端午の節句

男子の節句であり、いまは祝日「こどもの日」となっている5月5日。菖蒲の節句ともいわれるように、古くからショウブと深いかわりを持ってきた。古来、旧暦の5月は雨期に入り、悪疫がはびこり厄除けをしなければならない悪い月とされていた。このため、月初めの「午の日」に軒にショウブやヨモギを吊るし、ショウブの湯を沸かし、ちまきを食べたり、薬酒を飲んで災厄を払った。男の子の節句といわれるようになったのは、朝廷の騎射の行事、武家時代になってからの流鏑馬（やぶさめ）など、男性的な行事が行われ、また「菖蒲」が「尚武」に通じるため、コイのぼりを立て、武者人形を飾って男の子を祝った。

## 七夕

7月7日の行事で、牽牛（けんぎゅう）・織姫の二つの星が天の川をはさんで、年に一度だけ相会するという伝説が由来。古くはこの伝説にあやかって女性が裁縫の上達を願う気巧奠（きこうでん）祭りが行われてきた。室町時代には歌をつくって供え、江戸時代にはイモの葉にたまった露で墨をすって願い事を書き、五色の短ざくや色紙を葉竹に飾る七夕祭りが形成され、現在に引き継がれている。

## 十五夜（中秋の名月）

陰暦の8月15日の満月で、新暦では毎年日付が変わる。行事は中国の仲秋節にならって宮中で月見の宴が開かれたのが始まりである。この夜、月にだんご、サトイモ、サツマイモやススキを供えて月見をする。ススキには月の神が宿るものとされ、また豊かな花穂には、収穫期を前にして実り多いことを祈る心が込められている。この夜の月は「芋名月」と呼ばれるが、これはイモを中心とした畑作物が供えられるからだという。ただし、中秋の明月の夜は意外と天気が悪く、月見できない年が多く、翌月の9月13日の満月は晴れが多く、よく月を眺められることから「名月に月なし、十三夜に曇りなし」の言葉もある。

## 冬至

昼間の時間が最も短くなる日で、12月22日ごろだが、陰暦のため毎年、日にちが1～2日前後にずれることがある。この日は、柚子湯（ゆずゆ）に入り、小豆粥（あずきがゆ）や南瓜（かぼちゃ）を食べるなどして無病息災を願う習慣が伝わってきた。柚子湯は菖蒲湯と同じく、けがれを落とす名残りとしてされているが、風邪などを防ぎ、ひび、あかぎれに効果がある。小豆の赤い色は邪気を払い、栄養価の高い南瓜（かぼちゃ）は野菜の少ない冬場の栄養を補うためといわれている。この日を境に日足が長くなるので、太陽が戻ってくるとの意味から「一陽来復」ともいわれ、長い寒い冬を控え、「冬来たりなば春遠からじ」の願いが込められた。



ジュリアン

**樹里安**

川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」  
 発行：令和3年3月  
 公益財団法人 川口緑化センター  
 〒334-0058 川口市安行領家 844-2  
 TEL.048-296-4021  
 ホームページ：<https://www.jurian.or.jp/>